

たむら市民ネットの視察から

～1日も早く脱原発に向けた社会をつくる
岩本ひろ子

7月4日、福島県田村市の市民による健康を守るネットワーク（たむら市民ネット）を視察しました。田村市は市域の一部が福島第一原発から20キロ圏内に入るまちです。ここで暮らす人たちは、日常生活の中で被曝量を減らすことに心がけながら生きていかざるを得ません。たむら市民ネットでは、市民の健康を守るため簡易測定器を購入し持ち込まれた食物や土の放射線量を測定しています。

お話を伺った代表の鈴木匡さん、ご自身も車椅子で生活されている鈴木絹江さんご夫妻は、各地で福島の現状や原発について考える講演会、実際の体験をもとに障がいのある人の防災について伝える活動もされています。

福島では3.11から2年半経ってなお放射能の不安、地域の中での分断、家族の葛藤などが続いています。福島の今を伝え、保養への支援を行う、脱原発を発信することなど東京に暮らすわたしたちのやるべきことを確認する視察となりました。



田村市の船引駅前に設置された放射線量を測定するモニタリングポスト。福島県内のあちこちに設置されている。
(平野・日向・岩本)

ゆうやけ第3子どもクラブを見学

～障がいのある子どもの放課後の居場所
平野ひろみ

小平にある「ゆうやけ子どもクラブ」は、今から35年前に子ども4人から始まりました。現在は第1・第2子どもクラブと新設の第3子どもクラブあわせて登録者は90人になります。

2013年4月、東京都の補助金制度から国の制度「放課後等デイサービス」に位置付けられました。

先日、鈴木町に新しくできた第3クラブを見学してきました。特別支援学校や小・中学校からの送迎車がつくとリュック姿の子どもたちが降りてきました。スタッフは「お帰りー！」と受け入れ、着替えの手伝いをしたり、車からなかなか降りたがらない子には根気強く声をかけて接していました。

「単なる預かり」でも「訓練」でもなく、放課後の居場所として「生きる力」「気持ちの育ち」に視点をあてて向き合う活動をされていることがよくわかりました。

これからも子どもたちの豊かな放課後を目指して、私たちもよりよい国の制度を求めています。



ゆうやけ子どもクラブ送迎車の前で。
(平野・岩本・日向)

財政研究会合宿に参加

～小平は財政事情からも
自治の精神での打開が必要

日向みさ子

6月30日～7月1日、地方財政が専門の澤井勝さんを講師に毎年続けている勉強会に初参加しました。今年は全国から県議、市議、村議、市民15名が参加。事前に宿題だった過去10年間の小平市の市民税収入（個人・法人税、固定資産税、軽自動車税、たばこ税、都市計画税などの内訳）を提出し、各種資料を持参して出かけました。

講師の話を一方的に聴く座学ではなく、資料を分析し意見交換するという実践的な形式でした。小平市は財政力指数が1.0付近を上下し普通交付税の交付・不交付団体を行き来していますが、そのことが庁内の慎重な雰囲気と関係あるのでは、

という分析に講師も「否定はできないね」との弁。また個人市民税の動向は超高齢社会のなかで重要であることを再確認、経年で財政分析する意味を学びました。

2日目の公共施設の維持管理については、財政の厳しさが増すこれから、まず地域のデザインを描き整備する必要性を痛感しました。受身ではない自治の必要性を財政面からも確認する内容の濃い2日間でした。



持ち寄った決算カード、施設白書などの資料は15自治体分。比較することで見えてくる「わがまちの特徴」もある。